

風 狂

第58号

風狂の会

【詩】

セイウチと北極熊	長尾雅樹
齧る	富永たか子
5月の便り	高 裕香
躑躅の道	原詩夏至
メロンパン	なべくらますみ
ドック オブ ベイ	さとうのりお
誰もが詩人になろう	高村昌憲
まつうら鉄道	出雲筑三

【風狂ギャラリー】

三浦逸雄の世界（四十二）	三浦逸雄
--------------	------

【エッセイ】

老人妄語（一）	北岡善寿
略奪された名画の行方	神宮清志
昭和は遠くなりにはけり？（2）	高島りみこ

【翻訳】

アラン『大戦の思い出』（二十四）	高村昌憲 訳
------------------	--------

執筆者のプロフィール（五十音順）

北極の夏の或る日
土肌を晒^{さら}している
小さな細長い地表に
セイウチが
何百頭と
まさに芋を洗う
という状態で
その地に集まってくる
何ともうさんくさそうな
少しもかわいくないセイウチ
その集団を
一頭の白熊が発見して
凝っと覗いている
それからやおら
大きな図^{ずうたい}体で
白い体が
セイウチの方へ移動する
セイウチは気付かない
かなり近くまでくると
白熊はいきなり大きく吠えた
二回 三回と
セイウチは熊の存在に気付き
一目散に氷の海へ
我れ先にとあわてて逃げていく
騒ぎが収まって
その細長い大地に
何十頭かのセイウチの死体
彼らは彼らの仲間によって
踏み殺されてしまったのだ
白熊はやおら近づいて喰^くいつくすのだ

明るい昼さがり
あまりにも生の時間が重すぎて
ころがる林檎を齧る
冷たく沁みて
香よく匂って...

ささやかな親を齧った
うなだれる友を齧った
玉響に呼びかける産土の
なんと歯ざわりの悪さよ

風が音もたてずに通る
あまりにも近くを通るので
撫でてやりたい
しるべもなくて来た道

林檎を齧る
空にも
雲にも
移ろう花にも
こころは誘われなくて

からりと晴れっきりの
春の終わりを
なにもかも飽きてしまった

5月の風 爽やか
そんな風を全身に感じ
心の芽にも 風が吹く

5月14日 帰宅して玄関を開けると
花の香りが広がっていた
花籠にピンクの薔薇とカーネーションの束

先生！ 明日「先生の日」です。
私は元気です。大学受験 頑張ります。
いつもありがとうございます。とメッセージ

6年前 初等部を卒業した ジヒョンさん
3年生から6年生まで 日本語を教えた子
毎年、先生の日カードと年賀状を下さる子

三十数年の教員生活が来年3月で終わる。
私の最後の「先生の日」を知っていた。
5月の風と花の香りと言葉が心にしみる。

世界が二人だけのものであれば
と願うのは別段
若い恋人たちだけはない
例えば昨日
食道の精密検査を受けた方がいいですよ
と助言された
今年還暦の中国出身の女と
その五歳年下の日本人亭主の
朝の散歩
いるんだ邪魔者が
喉のあたりに
と女はぎこちない日本語で訴え
それから少し黙る
亭主も黙っている
山手通りは躑躅が満開で
鮮烈なピンクがひたすら目に痛い
妊娠だよ
ともかく一緒にいるしかないんだ
女は再び言う
うまいことを
〈身籠るとは生と共に死を孕むこと〉
そう言ったのは確かりルケだったか
恐らく悪気はなかったのだろうが.....

そうかそれなら共に俺たちはこれから
共に見守り育むのか
〈死〉を
そいつがいつか元気な産声と共に
体内から生まれ出るその日まで
これまでも知らずにそうして来たように.....

了解だよ
亭主は頷く
空を見上げたまま
だが声には出せない
いるのだ邪魔者が
やはり彼にも
喉のあたりに
躑躅は行けども行けども満開で

二人はもうそろそろ疲れている
それでも立ち止まり引き返すのが何だか
負けるみたいで不安で
言い出せない
口火を切るのはでもやはり俺だな
亭主は思う
妻の痩せた背と白髪を見ながら
さあ そろそろ帰ろう
そうして夕方もう一度来ようよ
薄明りの中
瞬き始めた星々に照らされた躑躅は
きつともっと優しく綺麗だよ

クリーム色の表面は
カリカリと
斜めの包丁目が際立って
白く盛り上がる焼き目
幼い女の子のあこがれ

「甘いものはしっかりと夕食を食べてから」は
ママの掟 それを条件に
スーパーで一つ買ってもらった
手の中に心地よい重さ
思わずこぼれた笑顔

とは言っても
新鮮なメロンが一切れ入っている訳でもなく
表面にメロンの皮が張り着いている訳でもない
メロンの香りすらなく
誰が命名したのか

あのマンガの中には可愛い女の子
メロンパンナという名で出ているそうな
アンパンマンの勇気に並ぶ
優しさを求められて

私も今 夕食を済ませたところ
目の前にふっくらとメロンパンがある
しばし少女の気分になってみる

ドック オブ ベイ さとう のりお

脳ミソ腐っちまったのかい！

俺にこんなアルビノ野郎どもが好みそうなへなちょこソングを歌えって言うのかどうかしてるぜ！

わかったよ

今回だけだぜ

叫び過ぎて喉をちょっとやっちまったところだからな

皮肉なもんだな

糞みたいな曲が糞みたいな国でNo.1になるとはな

もう少しでヨーロッパだぜまた叫び倒してやるからな

おい 大丈夫かよ！

機長がなんか泣き喚いているぞ！

ジーザズ！どうせそんなこったろうと思っただぜ

飛行機共々海の藻屑になれってことかよ

そりゃそうだ

奴隷の子孫が幸福になっちやいけねえやなあ

母さん

母さんより先にいくことを許してください

あばよ ジーザズ！

あらゆる事物や自分自身の苦悩からも
身を引く方法を身に付けることである
そこから新しい対象を創り出すことも
醜悪なあらゆる惰性を超える力になる

詩人は崇高なものを自然に目指す人だ
従って現在をその儘受け入れずにいる
詩人は自ら創った秩序に身を置く人だ
従って剽軽なふざけた詩と無縁でいる

詩の創作とは野蛮・恐怖・絶望に対し
自らの秩序の中で力を発揮することだ
真・善・美が一つの秩序の中で発展し
自らが創始者であると自覚することだ

読者はその証拠を求めないことである
それらを列挙しても最高の詩の創作が
決して出来ないことは証明されている
観念とは説明すれば真実になるのだが.....

何時までも叫びや嗚咽に身を任せずに
そして誰もが言葉と共に詩人になろう
一時的激情と共に動物の様に生きずに
持続する観念と詩と共に詩人になろう

トンネルに突入する車体が
ぶつからないか一瞬警戒する
くぐり始めてふうっと一呼吸

次々とトンネルが来るたびに
今度もぶつかることは
ないと言い聞かせた

一時間前まで事故はなかった
同じ路線ではないか
それでも毎回でる緊張

トンネルを抜けると森のトンネル
光の帯が一直線にふりそそぎ
新芽きらめく森の参道

次は左カーブまた右カーブ
電柱がないので
空とは身近なものを知る

トンネルはどれも石造り
都会だったら鉄橋にするだろう
プオープオーと警笛が鳴る

左右というホームに着いた
へんな駅名が多い鉄道だなあ
よくみると左石だった

無人駅をでると踏切でもないのに
警笛がプオーン
動物とびだしの看板が新しい



三浦 逸雄「はためていたせんたくもの」 8号（アクリル・紙） 2019

私は本を読んで、これはと思う箇所をノートに引き写しておくのだが、長年にわたってそういう何にもならないことを続けて、つれづれに自分の慰みとしてそのノートを捲って見ることもある。最近数あるノートの中に現代の科学技術文明を痛烈に批判した誰かの文章があったような気がして探したが見つからなかった。見つからないとどうでもいいという気になって、別のノートをぱらぱら捲っているうちに萩原朔太郎の発言が出てきた。

＜そもそも詩歌俳諧は、「嘘を巧みにつくこと也」と芭蕉がその遺文集の中で言っている。「すべての詩は嘘である。だがすべての詩は真実である」と、ジャン・コクトーもまた同じことを言っている。

「嘘をさえ書けないような詩人は無能である。真実をしも言い得ない詩人は似而非物である」と、私もまた最近ある詩論に書いた。

嘘をつくということは、ただ詩人に限った話ではない。すべての文学者は嘘つきである。特に小説家は嘘つきである。詩人は嘘つきほど天才である。（白髪三千丈は一つの例である）＞（嘘と文学）

朔太郎は大きく出たものである。こんな禅問答のような詩論をつきつけられたら、大多数の現代詩人は沈黙せざるを得まいが、沈黙しないところをみると、天才意識に動かされているのかも知れない。

この他「詩人の使命」から抜き書きした文章もあるが、現代詩人が喜んで飛びつきそうな議論とは思えないので割愛して「漂泊者の文学」から永井荷風の件事を出しておこう。

荷風氏の文学は彼の詩人的にすぎる生活自体の悲劇から出発している。六十歳の老年になって、家族から離れた孤独な独身生活をし、野良犬のように彷徨しながら、身分をかくし、交番の前を恐れながら、素性もわからぬ女の許に居続けをしている。ということは何という痛ましい漂泊者の人生だろう。彼の安住すべき家郷は、その家庭にもなく、その情婦の家にもなく、そして実に現代の日本にもないのである。

荷風の死は孤独死であった。荷風は畳に爪を立てて息絶えていたという話を私はある作家から聞いたことがある。荷風は金を持っていたが、家族には恵まれなかった。孤独死は彼が選んだ最終の路であった。私の知る作家は、「ぼくも荷風のように畳に爪を立てて、死ぬんじゃないかな」と自嘲的に言ったが、年老いて入院し、奥方に見取られて旅立って行った。

こういう辛気臭い話は止めて次に移ろう。荷風よりもっと前の時代の話で詩人に関係がある。正宗白鳥は作家、批評家であって詩人ではないが、島崎藤村の「若菜集」くらいは面白がって朗詠していたという。他の詩人のものは、あまり読んでいないようである。例えば薄田泣菫の「暮笛集」なんかに感心しなかったと言っている。白鳥は自然主義作家だから嘘はつかない。けれど新聞記者として文壇、詩壇には接触する。石川啄木は二十二歳の時に三十歳の白鳥に会う。啄木が白鳥に会うのはこの時が初めてではなくて、四年前にも読売新聞社で会っているが、啄木は白鳥の応対ぶりが余程気に入っているようである。私は一度そのことをエッセイに書いているのだが、行きがかり上、啄木が森川町一番地桜館に住む白鳥を訪ねた時の件事を出しておく。

「随分ブッキラ棒であるとは人から聞いていた。入って行っても、ロクに辞儀もせぬ。茶を汲んでも黙って出した切り・・・それが頗る我が意を得た。何処までもブッキラ棒な話と話。二時半帰る時は、しかし、頭を畳

に押しつける様にして、突然バツタの如く叩頭をした。玄関まで送って来た」

啄木の人物描写は簡潔的確で白鳥の特色がよく出ている。啄木は明治四十二年三月二十一日には、浅草新片町待合いのならんだ町に島崎藤村を訪ねている。「おとなしい人だ、しっかりした人だ。話は面白かった」と啄木は簡単に印象を書き残しているだけである。その「おとなしい人、しっかりした人」がやがて新生事件を起こすのである。啄木は短命であったので、確か藤村論は書いていない。藤村論を書いたのはブッキラ棒な白鳥であった。この論は詩の歴史を知る上で無駄ではないと思われるので、抜書きした文章から掻い摘んで出してみよう。

新体詩は、和歌や俳句では現わし切れない詩情を現わさんとするので、感じ方が舶来風であり、バタ臭いように思われていたりしていたが、和歌などが舶来調になり、バタ臭くなり、現代人向きの甘さ辛さをしたたかせたものが多くなり、今は昔のように、「詩」と「和歌」とが新旧を争うような趣はなくなった。

昔、「この頃の新体詩よりも、長唄の越後獅子なんかの方がいい」と言って泡鳴などに抗議を持ち込まれたのであったが、人間の気持は年を取っても変らないものか。この頃、たまに知名人の新しい詩に目を触れるとたんに、「私はこういう詩よりも歌謡曲の方が面白い」と感ぜられる事があるのである。「詩とは何ぞや」と訊かれたって、東西の古人の定義に飽き足らない我等には、ハッキリした返事が下されないのだが、人間の心につよく根をおろして巣くっている「詩」に憧憬する気持ちが永久に存在するなら、現代詩人の詩に、もっと「詩」が漂っていなければならぬと思われる。或は沈潜していなければならぬと思われる。現代の詩には昔の詩には見られないような叡智の動きが窺われるようにも思われるが、その叡智は詩のなかに融けていないで、これ見よがしに示されているだけである。

この文中に、「この頃、たまに知名人の新しい詩より歌謡曲の方が面白いと思う事がある」という一節がある。この知名人が誰であるかは知りようもないが、私は西脇順三郎が歌謡曲と言われるような歌が好きであることを知ってエッセイに載せたことがある。順三郎生誕百年を記念して、安東伸介、新倉俊一、岡田隆彦三氏のてい談が三田評論九五四号に載っているものからの引用であるが、安東の発言だけで十分であろう。

安東一・・西脇先生の詩の言語のリズムには非常に音楽性があるということはよくいわれています。ところが、音楽の鑑賞ということになると、実は西脇先生が日本の三大歌曲と言っておられたのは、村田英雄の「王将」と「黒田節」と「早稲田大学の校歌」なんです（笑）。まあ、先生はうちに来られる度に、「王将」を聴かせろとおっしゃる。ですから私の家にはその三大歌曲のレコードがそろっています。「王将」など、LPがすり切れてしまって、三枚も買いました。何しろいらっしゃると、七、八回も聴かれるんです（笑）。

見当違いかも知れない知名人を登場させて道草を食った嫌いはあるが、元に戻ろう。白鳥の藤村論は昭和二十九年の文学界二月から四月にかけて発表されたことになっているが、考えて見ればずいぶん昔のことである。それでも現代文化に縁の薄い私には読める議論である。岩野泡鳴の名が時々出てくるが、野獣派であって、その実体をよく知っていたのは啄木であった。漱石の所へ行って、相手を二流の文学者だと罵った男でもある。しかし世間は漱石を二流作家と見做してはいなかった。漱石は今日でも森鷗外と共に明治の文豪である。しかし明治は文学の黎明期であった。白鳥が論ずる藤村の評判はどうであったか。漱石に書翰集があつて、それを読むと、漱石は「門下生などに宛てた手紙の中に、二三箇所「破戒」を傑作として推奨している」と白鳥は言う。このあと

は白鳥自身の論評である。（続く）

美術品とカネをめぐる話はいろいろあって、知れば知るほど興味尽きない。美術を美術館・博物館などの展覧会で鑑賞し、自宅で印刷物によって鑑賞している分には、何も起こらない。ところがこれを手に入れることが出来る「商品」となったとき、壮大なドラマが始まる。そこには金銭の取引があり、しかも将来値上がりが期待出来るという投資の意味もある。そこから人の限らない欲望、そして愚かしさ、とんだ悲喜劇が起る。よくいう言葉に「絵は買ってみなければ分からない」ということがある。小市民の一人として美術館・博物館などに出かけたり、画集を買い込んだりしていても、十分に心の栄養になる。

では、なぜ買ってみなければ分からないと言われるのであろうか。実のところこのわたしは、美術品を買った経験が八〇回くらいある。油彩画、日本画、西洋骨董、陶磁器、工芸品、画帖などなどである。その間いろいろなことを経験してきたし、知り得たことは少なくない。まず買うということには並々ならぬ決意が必要だ。たとえ一万円のものでも、いろいろな想念が駆け巡り、踏ん切りをつけて買うことになる。いよいよ買おうと決断したときの興奮と快感には、言い尽くせないものがある。のちには一〇〇万円のモノも買っているが、駆け出しの頃のほうがより興奮した。美術品を買うという行為ほど、心躍るものはないかも知れない。

買ったものを持ち帰って、絵なら壁にかけて鑑賞する。日夜これを観ていると、会場で見ている時は気付かなかったものが見えてくる。ここが問題で、なぜこんなツマラナイものを買ってしまったのだろうと思うことも再々である。これは本当にいいものを手に入れたと思うのは、実のところ二割あるかないくらいだ。なかには買って帰って半日もしないうちに厭になってしまうものさえある。下見は何度もしているし、これはなにがなんでも入手したいと思うものにぶつかるのは、滅多にあるものではない。一年に数回がいいところだ。それでも買ってから「しまった」という作品が結構ある。これまで買い集めた美術品で、少なくとも死ぬまで手放したくないと思うものは、実のところ一〇点に満たない。この辺が買ってみなければ分からない、と言われる所以ではないかと思う。とはいうものの、これはどこか愚かしい滑稽劇ではないかという思いが、心のどこかに去来することも否定できない。

さて二〇一五年秋のこと「これは面白い！」と膝を叩きたくなるような報道があった。その意外性に今更ながら驚き、人間の不可思議さに感動を覚えた。今頃になってナチスの略奪した名画が大量に出てきて、その総額一五〇〇億円という。その所有者が不可思議な人だった。住民登録も、納税者リストにもなく、健康保険もない、まさに幽霊みたいな存在だった。彼の父親はユダヤ人の画商ながら、ナチスが略奪した名画の鑑定とそれを売りさばくことを要請されていた。ナチスが敗戦とともに消え去ると、残った名画をすべて空襲で焼失したとして着服してしまった。戦後まもなく交通事故で亡くなると、それがすべて息子のコルネリウス・グルリットに相続された。

息子はあらゆる人間関係を断って、その名画を売りながら暮らす生涯を送った。結婚もせず、友も持たず、一切の人間関係のない透明人間のような存在に自らなってしまった。ミュンヘン郊外の自宅アパートのある六階に住み、滅多に外出もせずひっそりと生きていた。テレビも見していない。受信料を支払うことによる社会的接点を避けていたのである。たまにスイスの画商のところへ絵を売りに行った。その汽車の中で簡単なことから疑われて全貌が明らかになっていった。しかしドイツ政府はこのことを公表しなかった。これを追及したのは週刊誌の記者だった。

そのアパートに張り込んでいくら待っても住人は姿を現さなかった。わずかに灯が洩れているのを確認して、住人が居ることは間違いないと確信した。そしてついにすべてが明らかにされ、週刊誌記者がその部屋に入ったとき、あまりに不思議な環境に驚いた。三〇年も前に賞味期限切れになっている缶詰とか、包装を解いていない

パジャマが大量に積まれていたり、忘れがたい風景だったという。このことから半年後に、この男はこの部屋でひっそり息を引き取った。八一歳だった。遺書が残されていて、残された名画のすべてをスイスのベルン美術館に寄贈するとあった。ドイツには寄贈したくない感情があったものと思われる。ちなみにドイツの法律では、三〇年以上保持していたものは、その保持していた者の所有となることになっている。コルネリウス・グルリットの父は有名な画家であり、祖父は有名な建築家だった。N響の指揮者だったマンフレット・グルリットは彼の叔父にあたる。こうした名門の家庭に育った者には、孤独な人が多い。大きな屋敷に独りで生涯を送るような人も珍しくない。そうした血を受け継いでいたとも考えられる。

ナチスが集めた美術品は約六〇万点と言われ、その九割がいまだ行方不明だという。どこかにあるはずだけれど、杳として行方不明のままである。この問題に関しては、わたしは一つの推論をもっている。トルコの世界的遺産である木馬で名高いトロイの遺跡に行ったときのことだ。当地の案内人が説明していた。「今残っているのは壊れかけた石造りの建物の残骸ばかりだけれど、出てきた宝物はすべてドイツに持ち去られた。大量に出土した工芸品・美術品があった。その返還をドイツに要求していたけれど、今はロシアに要求している」。

この最後に何げなく付け加えられた一言に、ピンとくるものがあつた。その旅行中バスに添乗してくれた女性が言った。「いま美術品の展示で一番充実しているのはモスクワとサンクトペテルブルクよ」。これを聞いていよいよ確信に近い推論が醸成された。

ナチスドイツがヨーロッパのほぼ全土を支配したとき、美術品の多くがベルリンに持ち去られた。そこで第二次世界大戦が終了するときのことを思い出してみると、真っ先にベルリンを陥落して乗り込んだのはソ連軍だった。そして国連軍が到達するのに約一か月あつた。その間にヨーロッパ中から略奪された美術品の多くが、ロシアに持ち去られたのではないかと推理したのだ。しかしこの推理は単純にして図式的である。現実はこのものではなかったはずだ。ベルリンにソ連軍が到達して来るまで、略奪された美術品の管理者は黙って管理していたであろうか。そんなはずはない。彼らがどんどん私物化して略奪していったであろうことは想像に難くない。ドイツ兵の多くがそれに加わり、最後には民間人も加わって、略奪し放題になった。「どうせソ連に持って行かれるなら、おれたちが盗っていけないわけはない」。むしろ愛国行為のように盗りまくった。戦争というものはそうした略奪と殺戮に彩られるものだ。ソ連軍がベルリンに乗り込んだときは、その半分も残っていただろうか。ソ連軍の中には個人的に私物化する輩が居なかったはずはない。それも上層の士官クラスに居た可能性が高い。略奪する者は交換価値の高い物で、持ち運びしやすい物を持っていったらうから、いまロシアの美術館に展示されているものはその残りということになる。それでもその多くが超高級の美術品ではないか。

持ち逃げされた大量の美術品はどうなったか。徐々に市場に出ていったであろう。今頃世界中のどこかで取引されたり、個人の所有となっていることだろう。実のところわたしはオークションで落札した四点の泰西名画を持っている。いずれも一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけて描かれた油彩画で、イギリス、イタリア、フランスのものである。どれも大いに気に入っていて、どの一つとっても美術館に飾られていても不思議ではないような作品ばかりである。調べてみると、その作者は日本では無名であっても、向こうでは結構知られている。日本人は無名の作者には目も向けない。だから安値に放置され、このわたしが落札できたのだ。この四点はもしかしたらナチスがらみである可能性もある。はるか東洋の島国に運ばれてくれば、そんな過去の暗黒の歴史も関係なくなってしまう。よってその可能性は高いかも知れない。目の前にある名画がもしかするとナチスによって略奪されたものかもしれない、そう思っただけだと、不思議な感動を覚える。そしてどこか不埒で愚かしく、滑稽感も湧いてくるのだ。

名画にまつわるエピソードには摩訶不思議なものが多い中で、これもその一つとして加わってきた。美術品という資産をめぐる人の欲望は限りがない。（了）

私は昭和47（1972）年3月に小学校を卒業したが、その1か月ほど前の2月19日から2月28日にかけて、長野県軽井沢の保養所で連合赤軍による「浅間山荘事件」が起きている。毎日学校から帰ってくると、おやつを片手にテレビの生中継に釘づけになっていたことを思い出す。まるでドラマでも観ているように事件や事故を観る。お茶の間のテレビという存在は、リアリティを取り除いて骨抜きにってしまうフィルターを持っているのかもしれない。「浅間山荘事件」は銃撃戦の末、死者3名、負傷者27名を出し、機動隊が強行突入して解決に至った。

その年の4月、自宅から5分ほどの所にある公立中学校に入学した。小学校までの通学時間が30分ほどかかっていたから、通学はずいぶん楽になった。近すぎて遅刻すれすれで家を出るということも多かった。隣の地区の小学校からの卒業生もその中学校に通うシステムになっていたから、学生の数も倍になり、かなり賑やかなものとなった。服装も私服から制服に替わった。その頃の校則は、現在の中・高校にあるような下着の色まで指定されたり、天然ウエーブの髪にストレートパーマを掛けさせられたり、茶色い髪色に対して「茶髪証明」なるものを提出させたりなどという、明らかに人権侵害の極端な校則はなかった。「スカートの丈が膝下何センチとする」とか、前髪は目にかからない長さという程度だったかと思う。それにしても日本の学校の校則は何もかもが雁字搦めで、自分で判断して決めるという、生きていく上でとても大事な行動を取ることができず、ただただ体制に従順な人たちを量産しているとは思えない。

中学生になると好きな音楽も日本のアイドル系から洋楽へとシフトしていった。カーペンターズやベイシティローラーズがちまたでは流行っていたが、私が嵌まったのはフレンチポップの旗手ミッシェル・ポルナレフ。今現在、ポルナレフを知っている人はどれだけいるのだろうか……。彼の作品で一番日本で売れたのはおそらく「シェリーに口づけ」だろう。そして、なんと私が中学2年の時にポルナレフが来日。これは絶対に聴きに行かなければならない！ ということでお小遣いをはたき、親に無理を言って、大宮の畑中の家から日本武道館へと電車を乗り継いでエッチラオッチラと出かけて行ったのである。いざっ！ コンサートが始まった。しかし、私の席は端っこも端っこ、ほとんどポルナレフの姿を見ることができない。私は号泣。見かねた会場係のお兄さんが空いていた見やすい席に案内してくださった。子どもだったとはいえ、お恥ずかしい限りである。

中学3年生の時には昨年、映画「ボヘミアン・ラブソディ」が日本でも大ヒットしたクイーンが初来日。こちらはどうしてもコンサートに行きたくなって武道館へ向かったが、クイーンの凄まじいパワーにやられたのか、コンサートの翌日から3日間も寝込んでしまった。そのことしか憶えていない。

高校受験も控えていて、猛勉強とまではいかないが、そこそこ受験勉強もしたはずである。あまり記憶にないのはあくまでも「そこそこ」であったからだろう。そして「幼稚園の先生になる」と将来の希望を語っていた少女（私）は、ある日突然「絵の学校に行きたい」と言い出すのである。親は心底驚いたに違いない。絵画教室など近所にはなかったから、中学の美術の先生にお願いし放課後に絵の指導を少し受けて、つけ焼き刃で受験に挑んだ。合格できたのは全くもって運がよかったのである。私は東京都杉並区にある「女子美術大学附属高校」に通うこととなった。中学校を卒業と同時に祖父の経営する板橋区の印刷会社兼自宅に同居することが決まっていたから、東高円寺駅近くにあるその高校に通学することは距離的にも無理なことではなかった。

かくして花のJK生活が始まったわけだが、人生初の女子のみの世界である。通称「女子美」は中高一貫校だったから、初めのうちは中学から上がってきた生徒と高校から入学してきた生徒の間に確執があった。中学組は中高を私立校に通わせることができる財力のある家庭のお嬢様たち。プライドが高いのである。高校組は中学組のお嬢様たちに比べると、ごく普通の家庭の子どもたちが多かったから、中学組からそこはかとなく放たれる差別意識についていけないものを感じていた。しかし、時と共にそれも平均化されていった。中学組のプライドが下がったのか、高校組のプライドが上がったのかは定かではないが……。

見目麗しいJK！などでは全くなかった、残念ながら。その頃教室にエアコンはまだなかったから、男子の目がないのをいいことに、夏にはスカートをたくし上げて授業を受けるわ、教室の掃除も手抜きもいいところで、教室の後ろにはいつも埃が渦巻いていた。高校2年の時は担任の教師が、複数のクラスメイトに交際を執拗に迫っていたことが発覚。クラスメイト全員で担任を囲み、断罪したこともあった。そんなこともあって私たちのクラスはちょっと恐れられていたのだった。因みに私は交際を迫られた生徒ではなかったが。

ちょうどこの頃「なぜ勉強をするのか？」という疑問がふつふつと沸いてきて、一時的ではあるが勉強に熱を入れることを止めてしまった。本を読むのは好きだったから、授業をサボって山手線を1周しながら本を読んだり、銀座の画廊に通ったりしていた。難しいお年頃だったのだ。

また祖父の経営していた印刷会社の状況が厳しいときでもあり、経営者は祖父から父に代わった。しばらくして祖父が脳溢血で倒れ、命は取り留めたが重い後遺症が残った。祖母は元気で祖父の介護は主に祖母がしていたが、両親にとっては大変な時期であったと思う。にもかかわらず世間知らずの中小企業のお嬢様は、今度は「大学は共学に行きたい」と言い出すのである。恐るべし！私……。そうして受験対策のために代々木ゼミナールの油絵のコースに1年ほど通って、受験のノウハウを身につけた。

私の大学入試は共通一次試験の始まった年でもあった。途中で勉強を放棄した甲斐あって？）、理数系の科目など何かが書いてあるのかさっぱり分からない。マークシートだったから、当てずっぽうにマス目を塗りつぶしてはおいたのだが。

しかし心やさしい女神様は、そんないい加減な私に微笑みを送ってくださったのだった。これまた運よく「多摩美術大学」に合格することができた。試験は油絵を描く、小論文、英語だったが、英語はマークシートではなく筆記式だったため、これまたさっぱり分からなかった。後々フランス語の教授が「英語が20点以下の受験生は落とすように、と主張したが通らなかった。大学生になる者には最低限の知識は必要だろう」とおっしゃっていたが、心の中で「ひゃ～、それは私だよ」と足切りされなかった幸運に胸を撫で下ろしたものだ。高校卒業間際の数学の試験では人生初の赤点。微分積分が分からない。再試験で隣の人の回答を写してなんとか卒業を果たした。未だに微分積分は分からない。分からない自分をちょっと後悔している……。（つづく）

参考文献

<http://www.asahi.com/special/sengo/visual/page43.html>朝日デジタル「戦後70年 浅間山荘事件」

第二十章

私はその時に『芸術論集』の第一章を書きましたが、それは私にとって全く新規のことです。しかし、恐らくそれに興味を覚えた読者諸氏にとってはまさに少しも新規ではありません。発見されることについてしか良く書かれていませんし、興味のある新規の口調なのです。何故なら全てが言われていたからです。しかし、退屈にさせられた作者には何が出来るのでしょうか。

勿論、絵画や建築や音楽や詩には、幾つものありふれた考えがあります。そして裕福な様なものに目覚めたり、飛ばされているのを見せられると美になるのかも知れません。率直な人は、これらの全てのものを冷笑的な能力に従わせながらもそこで役に立つことが出来ます。古い修辞学と新しいほら吹きの不条理の間には、一本の道があるのかも知れません。スタンダールを読んだり、ダ・ヴィンチやレンブラントのデッサンを研究したりして、哀れな砲手たちを忘れるしかありませんでした。私たちの話によって学生の小部屋に変えられた大尉の避難所で、私たちは平和な時代のための計画を作りました。美術館や記念建造物や画商を点検しました。実を言うと、これらの計画を行ったのは特に大尉でした。私としてはこれらの時間を全て無視した後に私の視線の高さにある、自然に出来たこれらの氷の瘤を見詰めていましたが、他の数々の瞑想が蘇って来ました。戦争とこれらの計画との多くの繋がりとは避難所の中で行われ、忘れられる運命にありました。しかし大尉は望んでいたものが分かっていました。平和な時になって真っ先に私はドアの下に彼の絵葉書を発見しました。私は本当の友情の動きを乗り越えながら平然として答えました。何故でしょうか。私が詩人や画家や演説家たちでさえも養っているこの世界を除いた儘で何故居たのか、それも同様に尋ねられるかも知れません。実際に私は、戦友たちの中では最早一人しか知りません。彼は労働組合員です。第十四連隊の感じの良かった大尉のアレル神父です。私は戦友たちを少しも探しませんでしたし、その時に彼らを見付けることは私には十分に容易でした。それに反して私は、トラックの座席にのろ鹿の股肉があった人物のバラールを探した時がありました。そして長い間、石工たちの足場を熱望していましたが、そこで私は歌手のムービーに会うことを希望しました。さもないと私は彼の表敬訪問を再度受けることでしょう。要するに私はやりたいことを選びました。そして、見捨ててあらゆる機会を変えたことに自ら良しとしない日は少しも無いのです。それは私が、不条理で機械的なこの戦争を許すことが出来なかったということです。それは私が、今までになく巧みにそれらの所定の場所を私に開けたということです。それと同時に大変に恐ろしいことも私は知りました。本当の処、私が垣間見たのは政治的紛争があらゆる国に同じ様にありましたし、その紛争は主人に対する奴隷の反乱以上のものではありませんでしたし、愚かな殺戮の後で待たなければならなかったことでした。〈重要なこと〉へのどんな努力も信じさせるためのものでしたし、鉱山の坑夫やこの種の仕事の様に恐らく割の悪い仕事には少なくとも最高の賃金を望んでいたことを信じるためのものでした。何にでも良識や実践という薬がありますが、それは戦争の隊形や脅威が逸らしたり延ばしたりするための知られた方法になるのを斟酌している訳ではありません。私は全く別のものを見たと思いました。つまり戦争の隊形そのものに大変精力的に保たれている不平等が、その他の全ての不平等の原理でしたし、その源泉は不公平を導いていると感じた人々です。しかし、それらの方法がそこから押し進めることには彼らに欠けていました。そして恐らく彼らは諦めて大変早く富裕者を望んだのであり、その上平和になることを願いました。ところで、あらゆる方針において上官たちは同一の原則に従っていた様に私には思えました。ジョレスの『新しい軍隊』はそれが出版された時に、私の眼には恐ろしい作品でした。しかし廃止された数多い野営地において、学問と美德が各々その立場で野蛮の限界を遠ざけていましたし、戦争の体験後には更にもっとその様に私には思われました。そして、知識ある全ての人が命令で直ちに徴兵されても、少しも奴隷状態を選択しなかったのは明

白でしたので、私が最後に見たのは私の周りの人々が実際に殆ど等しい二つの集団に分かれて、話すことに反対する人々の社会でした。その一方の集団は権力と富裕と出世に希望を持った人々で、彼らは大変雄弁な古い教義を非難します。もう一方の集団は服従に捧げられた人々で、権力を拒む大変雄弁な小さな群と一緒にいます。しかし。前者の人々は教義から教義にさ迷い、?々全てを否定したり受け入れたりして危険な皮肉にまで行きます。後者の集団は未だ自分自身の教義を表現出来ませんでした。行為によるしか強くなりませんし、それは直ぐに戦いになります。

それ故に何をしなければならなかったのでしょうか。最初はありふれた考えを殺すことであり、そこから遠くに再び上がることです。というのも軍隊の秩序であった昔の秩序は形而上学的であり、宗教的でさえあります。そこでは私の仕事であるものを見分けなければなりませんでした。ところが、その結果はそこでは殆ど知覚出来ないものです。アカデミーの賛辞や偉大な地位への誘惑は、精神の批判部分を直ぐに沈黙させました。そして精神を信じることは、理性によって何も信じない様に養成される人には容易であるとさえ私は確かな観点から言います。どんな知性ある人も、あるいは殆どの知性ある人も、従って秤のもう一つの台に陥りましたし、そこには既に金色で飾られた底の付いた帽子と命令のための剣があります。彼は、仲間を非難するために役立てません。先ずは同じ誤りから身を守らなければなりません。理性的な集団とは、意志的であるにしろ無いにしろ圧力と解放の公平な点を、大変強くて勇敢な大衆に隠している数々の教義によって曲解する儘にせずに、大衆を止めて置くことにありました。困難な地位です。何故なら、割の良い猟犬の群が右側に牙を示している間に、労働組合員は左側を吠えないで済ませるからです。しかし私が仲間の組合員と共に毎年行って来た経験は、阿（おもね）ることなく納得させたり、集合しないでも参加することが出来たりするのを証明しています。私はそれ故に唯一の可能な地位で固く役割を果たしております。法に違反することなく、私は独裁者たちを罰する様にする困難な約束も又果たしています。これらの考えは、戦争が続いていた数年の間にやっとのことで明らかになったのです。

結局のところ、私が書いている年である一九三一年にG・フェレロ（1）という歴史家が、彼独自のもので歴史家たちの軍隊を動揺させるであろう方法で、その教義を解明しました。くるくる変わるこの動きは政治を大いに変えました。しかし私はそれらの予言を放って置きます。兎に角、今は少なくとも大佐である人物と共に芸術についての対談を楽しむことを私が恐らく拒まなければならなかったのは事実です。危険な関係です。私は、これからは大砲の話に戻ることにします。私はそこに長く残ってはいけなくなって来たのです。（完）

（1） G・フェレロ（一八七一～一九四三）は、イタリアの歴史学者で、一九三〇年にファシズムに反対して、イタリアからスイスへ去った。著書は『ローマの栄光と凋落』（一九〇二～〇七）、『古代文明の破滅』（一九二一）がある。

執筆者のプロフィール（五十音順）

出雲筑三（いずもつくぞう）

一九四四年六月、東京都世田谷区下北沢生まれ。千葉工業大学工業化学科卒。混迷と淘汰のたえない電子部品の金めっき加工を手掛けた四十五年を無遅刻無欠勤で通過した。芝中時代は実用自転車1000mタイムトライアルで東京都中学新記録で優勝、インターハイでは自転車ロードレースでチーム準優勝、立川競輪場での個人2000m速度競争において総理大臣杯で三位となった。趣味として歴史と城物語をこよなく信奉し、日本百名城に挑戦中である。仕事面では日本で最初の水質第一種公害防止管理者免許を取得、そのご東京都一級公害防止管理者、職業訓練指導員免許など金属表面処理技術者として現役で勤務している。三行詩集『走れ満月』（二〇一一年三月）・『波濤を越えて』（二〇一二年九月）・『五島海流』（二〇一七年五月）を出版。埼玉県所沢市在住四〇年になる。日本詩人クラブ・時調の会・世界詩人会議各会員。

北岡善寿（きたおかぜんじゅ）

一九二六年三月十日生まれ、鳥取県出身。文化果つる所と言われたばかりか、県下の馬鹿の三大産地の一つという評判のあった農村に生まれ育ち、一九四三年に出来の悪い生徒が集まる地元の中学を出て上京したが、一九四五年三月現役兵として鳥取連隊に入隊。半年後敗戦で復員し再上京。酒ばかり飲んでいる無能なジレッタントにすぎなかった。大学のころは今は故人の北一平や東大生の本郷喬らと同人誌「彷徨」で一緒。一九七四年文芸同人誌「時間と空間」創立同人。二五号から六四号（終刊）まで編集担当。一九九四年「風狂の会」会員となり現在に至る。詩集『土俗詩集』（一九七八年）、『高麗』（一九八六年）、『榧』（一九九一年）、『痴人の寓話』（一九九四年）を出し、詩集以外のものとして随筆集『つれづれの記』（二〇〇三年）、『続・つれづれの記』（二〇〇九年）、『一読者の戯言』（二〇一四年）を出版。日本詩人クラブ永年会員。日本ペンクラブ会員。風狂の会主宰者。

高 裕香（こうゆうか）

一九五八年二月二日生まれ、大阪市出身。幼い頃から、日曜日になると父親に大阪城公園に連れていってもらい公園中を駆けめぐる。菜の花畑やレンゲ畑で ちょうちょうやトンボを追いかけたり、おたまじゃくし、ザリガニを取って遊んでいた自然児。なんとなく父からルソー教育を受けていた。五歳からピアノを習う。大阪基督教学院の児童教育学科を卒業後小学校教員になる。現在、東京韓国学校で日本語の講師を務めている。日本語教育学会会員。ヤマハピアノPST A指導者。「心のアルバム」・「虹の架け橋」・「赤い月」・「日韓文化交流合同詩集」などのアンソロジー詩集に参加。二〇〇七年度「民団文化賞」優秀賞受賞。二〇〇九年、二〇一一年度「民団文化賞」佳作賞受賞。日本詩人クラブ・時調の会・世界詩人会議各会員。

さとうのりお

一九五〇年、新潟県生まれ。

一九七四4年、セツモードセミナー卒。

日本詩人クラブ会員

「山脈」同人

神宮清志（じんぐうきよし）

一九三七年一月九日、盧溝橋事件のあった年、徳富蘆花の住処の近く（東京府千歳村）で生まれ、幼年時代をそこで過ごした。二歳で父に死に別れ、敗戦前後の混乱の中、引っ越すこと十回あまり、小学校時代から働き、冬でも素足で過ごすという貧困の中で育った。大学卒業後サラリーマンとなって暮らしは安定し、三十歳代半ばに能面師に弟子入り、

以後三人の師匠についた。個展四回、団体展出品多数、最近では創作面も作り、イエス、ジャンヌ・ダルク等も作成した。能面制作はほぼ毎日ながら、最近は視力・体力の衰えもあり午前中のみ、午後は筋肉トレーニングとボールルームダンスに打ち込んでいる。いっぽう随筆同人誌「落」に四十年ほど在籍して、二百二十編の随筆を発表してきた。手作業をしていると、思いと考えが限りなく浮かんできて、書かずにいられない。いわば物狂おしいため息のようなものか。

高島りみこ（たかしまりみこ）

一九六〇年高知県生まれ、東京都中野区在住。

日本詩人クラブ、日本現代詩人会会員

詩誌「山脈」「花」同人

詩集『海を飼う』（二〇一八年 待望社 第32回福田正夫賞）

装幀家（高島鯉水子）

究極の趣味はキックボクシング（アマチュア）！最近は試合に出ていないが...

高村昌憲（たかむらまさのり）

一九五〇年三月、静岡県浜松市生まれ。明治大学文学部（仏文専攻）卒業。詩集『螺旋』（一九七七年）、『六つの文字』（二〇〇四年）、『七〇年代の雨』（二〇一〇年）。評論集『現代詩再考』（A & E・二〇〇四年）。翻訳『アランの「エチュード」』（創新社・一九八四年）、アラン『初期プロボ集』（土曜美術社出版販売・二〇〇五年）、ジャン・ヴィアル『教育の歴史』（文庫クセジュ 9 7 1・白水社・二〇〇七年）。共同編纂『齋藤忠詩全集』（土曜美術社出版販売・二〇〇七年）。一九九八年「現代詩と社会性—アラン再考—」が詩人会議新人賞（評論部門）。二〇一二年からパプーの電子書籍に、随想集『アランと共に』（全3巻）及びアラン作品の翻訳『一ノルマンディー人のプロボ』（全5巻）『神々』『わが思索のあと』『思想と年齢』『ガブリエル詩集』『精神と情熱とに関する八十一章』などを登録中。日本詩人クラブ会員・日本仏学史学会理事

富永たか子（とみながたかこ）

一九三四年 福岡県柳川市生

日本ペンクラブ・日本現代詩人会・横浜詩人会各会員

「回游」「めびうすの輪」「相模原詩人クラブ」に所属

既刊詩集①『シルクハットをかぶった河童』（第二四回横浜詩人会賞受賞）

② 『月が歩く』

詩人北原白秋と同郷。幼児教育に携わり、詩に親しんできた。相模原詩人クラブ主宰。三十五年間詩誌「ひばり野」を年一回発刊し現在に到る。「風狂の会」にて多くを学び席をおく。

長尾雅樹（ながおまさき）

一九四五年生まれ 岩手県出身

詩と思想研究会所属

既刊詩集

『悲傷』『山河慟哭』『長尾雅之詩集』

日本詩人クラブ理事長

なべくらますみ

一九三九年 東京世田谷生 日本大学文理学部国文学科卒業

日本現代詩人会・日本詩人クラブ・時調の会各会員

櫛自由詩の会同人

詩集『同じ空』『城の川』『色分け』『人よ 人』『川沿いの道』『なべくらますみ詩集』『大きなつぐら』
エッセー集『コリア スケッチラリー』（共著）
訳詩集『花たちは星を仰ぎながら生きる』（韓国・呉世榮）他

原詩夏至（はらしげし）

詩人・歌人・俳人・小説家。一九六四年生まれ。東京都中野区在住。著書に詩集『波平』『現代の風刺二五人詩集』（共著）、句集『マルガリータ』『火の蛇』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞俳句部門努力賞）、歌集『レトロポリス』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞短歌部門大賞）『ワルキューレ』等。小説集『永遠の時間、地上の時間』。
日本詩人クラブ・日本詩歌句協会各理事。
日本現代詩人会・日本短歌協会・現代俳句協会各会員。

三浦逸雄（みうらいつお）

一九四五年四月二日 札幌郡琴似町で生まれる。
一九六七年上京し 高円寺フォルム美術研究所、新宿美術研究所に通う。
一九七〇年スペインに渡り、マドリードの美術サークルCircro de bellas artesで人体デッサンをかさねる。帰国前の一年は、ベラスケス、グレコ、ゴヤ、ムリーリョを見るために、プラド美術館へ足繁く通う。一九八三年に帰国。
一九七五年以降、現代画廊（東京・銀座）、東邦画廊（東京・京橋）他で作品を発表する。

（以上）

同人誌 風 狂 (ふうきょう) 第 5 8 号

2019年5月21日 登録

<http://p.booklog.jp/book/126775>

編集：風狂の会（担当：高村昌憲）

編集担当者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/126775>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト